

野田之一さん、澤井余志郎さんを語る

17日の澤井余志郎さんを偲ぶ「一周忌」の集いは、私にとっても多くの感動と元気をもたらした。昨日に続いてレポートしたい。「記憶を記録する」ために。なかでも原告の一人、野田之一さんの話は、澤井さんを知るうえでも貴重なものだ。写真とともに一部だけでも紹介しよう。



「澤井さんを知ったのは、今から50年も前だろうか。漁師として働いていた。風邪だと思っていたら喘息だった。弁護士から『公害』という言葉をはじめて聞いた。磯津の女性たちが立ち上がり、澤井さんとも交流が始まる」

「澤井さんは神様以上の人だ。50年、一度も喧嘩なし。怒らない。誰からも嫌われない。最後まで面倒みてくれた」

「裁判の控訴のこと澤井さんに何度も聞いた。澤井さんは決して負けないと、言ってくれた」

「公害資料館もでき、澤井さんはいちばん良いとき、ずっと逝ってしまった。この一年どういふもんか発作はない。亡くなったが、澤井さんが後ろについてくれるので、頑張らなくては」



「澤井さんは何でも調べないと気が済まない人だった。50年、いつも一緒だった。わしは昭和6年12月16日の生まれ。澤井さんは3歳上だった。その澤井さんが12月16日に急に亡くなってしまった」



写真は上から順に。四日市再生「公害市民塾」の伊藤三男さんの質問に答えて話す野田之一さん。伊藤さんは映像で澤井さんの活動を紹介するとともに、温かく寄り添うように野田さんから話を引き出していった。2枚目は会場に展示されていた澤井さんと野田さん。二人は「語り部」としても、いつも一緒だった。3枚目は昨日も紹介したが、野田さんが澤井さんのご長女らの前に進み出て、これまでの感謝を述べられたところだ。ここにも野田さんの人柄があらわれている。4枚目は野田さんが前日に誕生日を迎えられたので、主催者から野田さんに「つえ」が贈られ、野田さんの嬉しそうな表情が心に残った。



(2016年12月20日)